

小栗判官 世界

著者	岩崎 武夫
雑誌名	日本文学誌要
巻	10
ページ	24-36
発行年	1964-09-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019084

小栗判官 世界

中世末期の戦乱と政治的社会的動揺のなかで流行した八幡信仰と結びついた説経節「小栗判官」について、具体的な作品分析を手がかりにしながら、そこに透視される遊行漂泊の民Ⅱ宗教的芸能集団の精神構造を伺うというのがテーマである。

八幡信仰についてはいくつかの秀れた研究や業績があるが、それらについての詳細はしばらくはずして、私なりの考えをまとめたものを先づ紹介して論をすすめたいと思う。八幡信仰は、古くから御霊とも若宮とも呼ばれて、志を遂げず途中で挫折した人の霊が、時をえて猛威をふるい、定住農耕社会Ⅱ村落共同体の常民の生活を脅し崇りをなしたりして害を与えるという信仰基盤の上に成立してきたものである。その神格は又、村落共同体を外から攻撃侵犯してくる遊行の神というようにも考えられてきたらしい。折口信夫氏は古代に遡り、その昔巡遊伶人と呼ばれる海部の民がいたことを想定して、それらの集団が信仰と芸能をたずさえて村々を訪れ、祝福と祓いを行った事実にふれながら、これら一群の漂泊民が村人からは非常に恐れられ、畏怖視されて、神を負うもの、神を使う人、又神そのもの

岩 崎 武 夫

のとして眺められていたと云っていた。更にこれらの漂泊民が村落を訪れたときは、村落の人々は彼らの操る呪術によって自分達の生活の上により結果を及ぼすことを願い、祝福や祓いが終れば速かに村落を去って貰うことを欲していたとも云っている。村人達Ⅱ常民にとっては、これら畏怖視されている漂泊民は外来する神なのであり、この神即人という関係で漂泊民が眺められていたことは古代中世を通じて消えなかったらしい。もっとも中世も末期に近づくに従って、村落生活の構造上の変化が激しく、土地を持たぬ彼ら漂泊民は次第に圧迫され、賤民化Ⅱ乞食集団化していった歴史的事実を無視するものではない。むしろ漂泊民の賤民化に伴う常民の蔑視感の強まりは当然考えられ、それと歴史的に形成されてきた畏怖感の上に立って中世の漂泊民Ⅱ信仰芸能集団は自己の漂泊の運動を独自に展開していったのだらうと思う。これら漂泊する芸能集団が八幡信仰と結び、その霊威が地方を席捲する過程でどのような方法のもとに村落社会と交錯して精神的な足跡を残し得たか。「小栗判官」を分析して象徴的に確かめたいと思うのが私の願いである。言葉を代え

れば、定住農耕社会を常に対岸視している漂泊民が、中世末の歴史的条件に制約されながら村落共同体と対立交渉し、どのような独自の行為体系をつくり得ているかにある。

説経節「小栗判官」の主人公小栗は英雄として設定されている。

英雄とは素朴に規定すれば行動し、犯し、征服することを自己の宿命とするような存在だろう。小栗はこのような条件を担って形象されている。それはある意味で小栗を背後で操る漂泊民の憧憬と願望が創造したような人物といってよい。小栗が追放の原因となった冒頭の大蛇Ⅱ女身との契りや、相模の豪族横山への強引な婿入りは彼が英雄であることを証してくれる。大蛇は古くは水神として農民から恐れ敬われていた守護霊であって、村落共同体にとっては軽視できないものである。大蛇Ⅱ水神の信仰変遷をあとづけて柳田国男氏は、「全体に我々の祖先が水の神に対して、かつて抱いていた信頼と感謝の念はかなり早くから薄れ、又衰えつつあったのである。農民はただ雨乞いの日ばかり大騒ぎをするだけで、常には淵の主人は人をとるとか、風雨を起すとか云って、之を恐れ憚るの習いのみが時として増長していた」と云った。柳田氏の云うように水神としての大蛇の権威は早く失墜していただろう。だが反面人にとって喰う恐るべき靈威あるものとして、それは中世における仏教の圧倒的な侵透や生産力の発達により神通力を失って、村落の片隅に追込まれてしまったとはいえ、逆にその為の農民の恐れ憚る信仰心を一層あおっていたことも考えられる。無意識にせよ大蛇Ⅱ水神に触れたり、犯すものは厳しい罰を以て報われるという信仰があったらしい。

「田村のそうし」や「すゞか」(室町時代小説集)には蛇身の女

と契った利仁將軍が、田村丸出誕を見返りとして死を下されている。このように村落共同体の常民に畏怖の感情であがめられ、地主神であった大蛇Ⅱ女身が、「小栗判官」では小栗が吹く笛の音におびき出されて契るといふ形に代えられている。これは大蛇自身が村落共同体の秩序を冒瀆していることを物語るものではないだろうか。小栗の側から云えば、彼の吹く無意識の笛の音が、大蛇を誘い墮落させたということになり、それは同じく村落共同体の秩序に向けての侵犯的な敵対行為を意味することになる。ここに村落共同体を外から襲ってくる御霊神の面影と、それに重なる漂泊民の姿が二重に透視されて英雄小栗の像に結びついたプロセスをみるのである。柳田氏は又、「竜宮女房、その他多くの日本の昔話において、蛇体に愛せられて特別の庇護を受けたという人間は大抵笛吹き名人である」と、昔話の世界から遠い過去に笛を吹いて蛇神に仕える盲人の徒がいたことを書いていたが、盲人Ⅱ漂泊者の類推が可能なら、笛を介した小栗と蛇神の関係は驚く程古い伝承を受けていることになる。しかもここには、昔蛇神の絶対的権威を条件として仕えた盲人との関係Ⅱ庇護の関係が対立の関係に置換えられ、蛇神自ら村落共同体の秩序を乱して小栗と契るといふ事態が生れている。信仰伝承を継承しながら、ここには庇護を犯しの関係に価値転換した意識がある。小栗は蛇神と契ったが為に追放される。しかし追放はされるが死はまぬがれている。反対に蛇神の方が小栗と契ったことが禍となって、帰るべき村落共同体内部の自らの住み処を失い、果ては神泉苑に入って竜神と居場所を争い、それが理由で天下の秩序が大いに乱れるという結果になってしまう。この発想は、村落共同体の混乱と破壊を意図したものであって、定住地を求めて竜神と争う蛇身

の姿は寧ろユーモラスであってそのユーモラスなイメージの中に発想者は鋭い皮肉をこめて常に対岸視している村落社会を犯し攻撃している如く思われる。存在することが村落共同体にとって、そのまゝ脅威や犯しであるような小栗は英雄であろう。発想者「漂泊者はそのような小栗に憧憬を見ているようなところがある。

これと異り、小栗自ら村落共同体を直接脅威侵犯しているのが次の相模豪族横山との対立である。横山のイメージは村落共同体の中で血縁的な同族結合をもって形成されている在地土豪の典型であって、そのひとり姫てるてに対して外から無法な婿入りをする小栗の行動は、彼ら横山父子にとっては同族的な一体感を破壊する許し難い攻撃なのである。横山の同族的な一体感を通して象徴されているものは、広い意味における村落共同体内部の家父長「祖神の投影を中核とする血縁的な共同体の強固な結束と秩序の世界であって、こうした一体感に結ばれている横山に対し、その血縁性を乱すような婿入りをする小栗の傲慢さは村落社会に対する激しい挑戦と敵対行為であって、蛇神におけるときとは違う発想者の敵愾心のようなものが感じとれるのである。そして婿入りから始まり「横山による小栗殺害計画、」その計画を砕く鬼鹿毛曲乘りにみせた小栗の英雄的行動「曲乗りが逆に横山の憎悪心をあえて遂に小栗を毒殺。に至るまでその起伏に富んだ語りの展開は、発想者の意識が村落共同体と交錯しつれ合いながら、行きつくところまで行く過程の屈折した構造を示している。小栗は自らの傲慢な行動の結果毒殺され、村落共同体に向けての攻撃と侵犯は挫折してしまう。この挫折をきっかけとして、今ひとつの問題が提起されるところへ出てきたわけであるが、その問題とは先にも触れたように漂泊民の憧憬と願

望の結晶として形象された筈の小栗が、その同じ発想者の手により何故毒死という無残な仕方では死ななければならなかったか、と云うことである。憧憬と願望という漂泊民者の意識の裏側にあるいまひとつの意識「死が明らかにされねばならぬだろう。そしてこの死の意識に迫る意味で、ひとまず作品を離れて問題究明の手がかりを発想者「漂泊する信仰芸能集団の生活の場に求めてみたいと思う。

賤民と呼ばれた宗教的な芸能集団の歴史を振り返ると、凡そ次のようなコースで考えられはしないか。古代において純粹な漂泊民として巡遊伶人と呼ばれる宗教集団がいたことは先にも述べたが、恐らくそれは中世に入ると土地を持たぬ半定住という形で次第に農山村に居つくようになり、それも山の下とか河の縁とか一般村落と隔離された場所に住むようになって、そこを根拠として遊行漂泊をつづけるという形態がほゞ出来上っていたのではないかと云うことである。しかしこの半定住も永久的に固定したものではなく、かなり流動変化したものであったろう。一所不住は漂泊民の負わされた宿運なのであり、それは停泊地に憩う彼らを追い立てて更に前方へとつき進ませた生活感覚であったと思われる。しかしともかくも土地を持たぬにしろ半定住の生活が漂泊民の歴史の表面にでてくるようになると、相対的に常民の彼らに対する賤民視の傾向が強められ、常民は彼らをヨソ者の感情的感情や排他的な眼でみつめるようになる。漂泊民の方では專業の宗教的芸能的職業の他に、田畑の番人や鳥追や、死人の処理までも食わんが為に扱うようになる。これらの状況が中世末期「室町頃にはすでに支配的になっていたのではなからうか。ヨソ者視と排他性は近世の封建性の成立と共に彼ら漂泊民を階級的に分解・凋落の方向をたどらせ、大部分は乞食集団として幕府の厳し

い監視のもとに部落に定着するようになる。そして乞食と全く同じ生活状態をつづけながら、一部は辛うじて門付芸人や予祝禊祓の没落した宗教的職業に従ってゆく。語り物などの芸人は都市の劇場に入って吸収消滅していき、残余は田舎まわりで細々と露命をつなぐというのがその凡その概略であつたろう。「小栗判官」の背景に考えられる漂泊民の歴史的状况は彼ら漂泊民が半ば定住し始めた現実が農山村を通じて現われてきた時代——中世の中末期を考えていいのではないかと思う。土地を得た定住ではないのだから、定着と云つても浮遊する奴隸労働の溜場のようなもので、多くは宗教的芸能的職業を主とした漂泊のかたわら一時的に身を寄せる仮宿であつたことは先に述べた通りである。しかし仮りのものであるにしろこの半定住という現実には漂泊民の意識にひとつの動揺を与えたのではなかったか。それは漂泊民の危機意識といつたらいいだろうか。その動揺の根にあるものは、半定住を通して村落共同体の内部へ定着することが、やがて漂泊民としての運命の終焉と敗北につながるものとして予知している意識である。この自己の未来を暗示する運命の予感に逆い、漂泊する自由の全的な確保と、そこに投入された漂泊者としての自負や情熱が、虚構としての語りの世界で語られたとき、小栗という英雄像が生れたのであろう。村落共同体の秩序を大胆に破壊衝撃する小栗の形象の背後には、進行する漂泊の定住化現象に対する本能的とも言える反撥と、憎悪と皮肉をすら交えた鋭い抵抗感のようなものが感じとれるのである。しかしそれならば何故その小栗を死に追い込んだのだろうか。小栗を陰惨な死のイメージで飾り立てて殺す動機がどこにあったか。彼ら漂泊民の意識の構造分析を通して解明されねばならない。

漂泊する自由を激しく求めつつ、それを現実に抑圧する状態に對立させ、戦いを挑む中から英雄小栗は形象されたが、その小栗は英雄の宿命に従うかの如く村落共同体を衝撃し、犯した。その犯しの行為には、漂泊民が現実には実現不可能な胸奥の憧憬や願望がこめられていた筈である。その憧憬とは、犯すことによって自己の漂泊者としての自由を守ることであつた。しかしここにどうにもならぬ矛盾が生れてくるのである。彼ら漂泊者の存在を支えている条件が宗教的な芸能者であつたという宿運である。彼ら漂泊者が芸能の徒として生きる限り、敵対視し対岸視している村落共同体の常民を必要とする。そして語りについていえば、語りが未だその本来の使命として持っている宗教的な意味合を失っていないとき、語りを通して常民と共有される世界は、情動的な一体感を契機とした深く敬虔的な調和の世界であり、語り手も聞き手(常民)もその情動的な一体感を相互に確めあいながら、その世界の底を流れる例えば神仏の恩寵といったものを感じとっていたかも知れないのだ。ここには犯しの意識とは、逆の、調和を志向する意識が宗教的な使命感を伴いながら、漂泊者の中に深く根を下ろしていたと思われる。このような調和の世界が宗教的な使命感として自覺されている漂泊者にとって、現実の状況がどのような不利な様相をはらむにせよ、その状況への不満や怒りが、犯しという形でのみ現われるならば、それは自らの手で自分の首をしめるような自殺行為を意味してくる。犯しは彼ら漂泊者にとって自己の存在の意味や根柢を失わせる決定的な敗北行為である。この犯しへの自己反省はやがて彼らを深い罪障感へと導いたであろうが、この罪障感が結局小栗を死に追い込んだ原因であつたと思う。犯しに向けての罪障感に激しい自己加虐的なムチとな

って小栗の死を陰鬱なイメージ一色に塗りあげたのかも知れない。言葉を代えれば、漂泊する自由の全的表現（犯し）への欲求と、その欲求が強まれば強まる程逆に深まってゆく罪障感の表白が小栗の死を陰影の濃いものにしていったといえようか。

だが死に至るまでの小栗の姿にあらわれたこの自己矛盾的な罪障感の表白は、実は今一人のてるて姫によって告げられているという事実にあらためて注目させられたのである。私はこれまで漂泊民の自虐的な心理の表白が死のイメージとして結ばれたことに触れたが正確に言うとその死のイメージや感覚は凡そ自己加虐的という言葉にふさわしくない程冷静な態度によって陰鬱ではあるが透明な世界として描出されている事実に気付いている。又小栗の死を予告したり夢占をするのがすべててるて姫であって、小栗の死はてるての視点を通して眺められているという点にも注目しているのである。てるては横山の娘ではあるが巫女的な役割を担われた形象である。

漂泊民の犯しに対する自虐的な意識の告発が、それ自身の憧憬の所産である筈の小栗の行動を媒介とせず、てるてという巫女的な視点から描かれているという事は、逆にいうと、巫女的な視点を媒介にしなければもはや自己加虐的な意識の表白は、それ自らの意義をなくしているということを物語っているといえよう。意義を失っているというのは巫女的な意識と切離されて、独自の価値を主張することはあり得ないという程の意味である。なお云えば、犯しについての罪障感を深く掘り下げても、そこから漂泊者のエネルギーはでてこないということである。この点については更めて後でふれよう。

小栗に集中的に託された罪障感を死として対象化できたのは、漂泊民の犯しに対する自己否定の心の強さであろうが、同時にその強

さを主情的なものとして昂揚させるのではなく、あくまで冷静に客観化しようとする巫女の眼の介在があったからだと思う。「小栗」を解く鍵はこの巫女的なものの正体に迫ってゆくことにある。私はてるてなどを形象してくる発想者の意識の系譜に、能野比丘尼やゴゼの活躍があったことを考えている。

彼女らの存在を前提にしないと小栗の死に漂う感覚は掴めないと思う。小栗の死を創り出してきた根源にあるものは、日常的な生活体験を通して常に死に触れ、死と親しみ、死を実感しつつ、そこに生れる幻想や観念や想像力を真実として温めることのできる能力の所有者でなければならぬ。巫女以外そうした資格の持主はない。小栗蘇生の地である熊野は古くから死者の霊の集まるところとも、又死者蘇生の地とも考えられていた霊場で、その熊野の霊験と結んだ巫女の活躍は中世を通じて盛んだった。地獄変相図などを掲げて彼女達は村々を廻り、人間の罪障深さを訴えて仏に帰依をすすめたり、常民に代って死穢や忌に関する祓の仕事を引受けていたらしい。人間における罪障感の告発と、祓と、この二つの機能を併せもった巫女の構造を、小栗の死のイメージの背後に置かぬと小栗の死の実体はかすんで了うだろう。後にも触れるが、小栗の死に漂う冷静な日常的感觉は、死穢を祓ってそれがやがて蘇生につながってゆくという呪術的な信仰に支えられた巫女の発想に源をひくものである。

しかしここで一つの確認が必要であろう。それは後に蘇生に連なるとはいえ、ともかく小栗は死んだのであり、それは漂泊民の理想像の敗北という限りに於ては漂泊民自身の現実的な挫折を意味しているということだ。小栗の死にあらわれていた罪障感の深さも小栗

の死は敗北をもって終ったわけ、小栗の死は漂泊民の死であり、漂泊民の死は漂泊する為のエネルギーの死であって、そのエネルギーの渇きはこの譚の事実上の終焉を論理的には物語ると云えよう。しかし死は小栗の罪障性を消しはしなかった。罪障が残る限りしそれを喰って逆に漂泊のエネルギーとして生かしてゆく生き方が生れてくる。作品の上では小栗の罪障を背負い諸国を流浪遍歴しながら、その苦難の旅と生活を通して小栗の代贖者として生きようとするてにそれがあらわれている。この代贖行為は次に展開する小栗蘇生劇にとって欠かすことのできぬ条件であり、こうした贖いを代償として小栗は現実に戻帰する資格を得たことになる。てるてにひきつがれた漂泊者のエネルギーは、小栗蘇生劇における最も大きな意味のある道行として生かされてゆくのだが、そこに漂泊民にとって、てるてという存在が無くしてはならぬものとして認識されてくる理由が生れ、もはやてるては巫女をはずしては漂泊できぬという状況が現実にも起きているという事が考えられてくるのである。

てるての代贖行為についてなおくわしく云えば、その意義は小栗は漂泊民によって自覚された罪障感の深さと、それを証す自己否定のエネルギーを、それとして心の内奥へと封じ込んで自壊させて了うのではなく、逆にそのエネルギーをバネとして動き出すとするもう一つの漂泊の運動なのである。この代贖性が無いと小栗てるての道行も生れなかったという事は先にも述べた。しかし問題は更に発展する。てるての代贖の結果、この世に蘇ってきた小栗の姿が何故人間の身体でなく醜惡な餓鬼身であったかということである。餓鬼身形象の構造を確かめることが先の小栗の死のイメージの解明とともに、「小栗判官」理解のきめ手になってくると思う。「餓鬼阿弥蘇

生譚」の中で折口氏は、餓鬼と云うのはもともとは山野に迷って旅人をうかがい、食物を欲しがったり隙をみてはその身体に乗り移って人間身に蘇りたい欲望にやかれていく精霊のひとつだと云われた。餓鬼の姿をこれらの精霊に与えて地獄の苦患に沈ませたのは仏教の影響だろうが、しかしとにかく餓鬼はあの世のものであって、此世のものであるという事はできない形象である。小栗が蘇った姿は、あの世での餓鬼の姿でなく、この世での餓鬼身である。いわばそれは死が此世でも生きているといった奇妙な感覚を生かした生きものなのだ。目も耳も口も五官の一切の機能を絶たれ、しかもなおやせ細った黒い骸を土車に凭せて生きつづけている。その姿から端的に云えば私は人間の執念の外化されたひとつの形をみてしまうのである。漂泊民の意識の問題にこれをあてれば、そこには断ち切った筈の犯しへの執念が払っても、抑圧しても、否定しきれぬ余執として残されて餓鬼身を生みだしたのだと云いたい。進行する漂泊民の定着化現象それが視覚化されては顔廃凋落への途に鋭く反撥してゆく意識が、英雄小栗を形象し、村落共同体を侵犯するイメージを呼び起したことにについては先に述べたが、このいわば漂泊民の全的自由を象徴する犯しの行為が、一旦は罪障感の名のもとに否定されながらも容易に根絶することのできぬ執念として自覚され、それが餓鬼身にかたどられて復活したものである。犯しへの執念は小栗の死とともに消えた筈だが、実はその執念は癒すことのできぬ余執としてこの世に残り、餓鬼身として生きているのである。恐らく漂泊民は、この餓鬼の姿から永劫に己れの身を苛む罪業のしるしをみてとったに違いない。それは業因という言葉がもっともふさわしく、それから逃れる方法はない。そしてこの業因にまで徹し

きつた罪障性の底から、漂泊民を馳って罪障ざんげする旅へと追いやる必然性が生みだされてくるのだ。罪障ざんげの旅とはこの場合犯しの執念から追れようとする衝迫であって、そこには現実との対立（村落社会との対立）や葛藤を放棄して、しかもなお漂泊民が漂泊の自由を保留し漂泊のエネルギーを持続しようとするときに生れる、自己のざんげを糧として逆説的に生きようとする方法なのである。ざんげを喰って生きつづけようとするいわば捨身の姿なのだ。

折口氏は前述した論文の中で、土車と餓鬼車から連想して、中世の中末期頃、全国を遊行して歩いた餓鬼阿弥衆と呼ばれる念仏衆があったことにふれて、そこに集まる人は癩病、片輪、乞食などで、身体の不自由と悲惨な姿を進んで人目に曝し、それが罪障ざんげに通じるものと信じて全国を遊行して歩いていったといわれた。そして小栗餓鬼身はこうした念仏衆の実際の姿を素材として生れたらしいと推定していた。更に語りによくある遊行唱導の徒の名が、そのまま作中人物の名として混用され、永い伝承過程の中で無理なく語りつたえられたのではないかと云っておられた。餓鬼身形象の素因には確かに犯しにとらわれている自己を醜いと感じる反省が働いており、それが念仏衆の罪障ざんげの悲惨な姿と結びついて餓鬼身を連想したのかも知れない。しかし折口氏の説得力に敬服しながらも、私は小栗餓鬼身形象の素因は念仏衆のイメージだけでなく、もっと別の契機が隠されているように思われた。例えばその餓鬼身のイメージだが、それは自己の余執をざんげして歩く自己暴露的な醜い姿ともとれるが、反面どこなくユーモアが漂っていて、虚心に云ってざんげ性という点にのみこだわることにためらいを覚えるのである。ここには一方でざんげの必要を人間＝漂泊者に向ってと

きながら、他方でそのざんげの原因となる罪穢を払い捨ててしまう悲情で逞しい巫女の眼が反映しているように思えるのだ。罪穢を払い捨ててしまうことのできる自信と感覚が、小餓の餓鬼身の中にユーモアを持込んでいるのかも知れない。

餓鬼身形象の背景にもやはり巫女的な眼が働いている。罪穢を払いすててしまう非情で逞しい巫女的なものの活躍は餓鬼身形象を契機として前面に躍りでてくるわけで、それは小栗の罪障＝余執をかえこみ、その罪障を払いすてる小栗であるの道行＝鎮魂と蘇生の道行に集約されてあらわれている。土車に凭る小栗と、その土車をひいて熊野に向うてゐる二人の姿は極めて象徴的で暗示にとんでゐる。餓鬼身にこめられているざんげの深さは、それを喰って漂泊がそこから生れてくるという意味では確に漂泊の為の強力な契機となるに違いない。しかし実際には、そのざんげにいくら深く沈潜したとしても、それは漂泊の為の契機にしかすぎないので、小栗は自らの力でこのざんげの深さを漂泊するエネルギーに転換させることはできないのだ。もの云わぬ餓鬼身は五官の機能を絶たれて、それ自身の力では一歩も進むことはできない。それが現実には漂泊するエネルギー＝道行として始動しているのは、てゐるの機能がそうしているからである。小栗であるてと組んで始めて現実に出す鎮魂の道行は、こうした形式を踏まぬ限り、すでに漂泊民の力が漂泊のエネルギーとして現実化しない状況の象徴的な構図を示しているものであろう。先に小栗の中にユーモアがあると云ったか、それは二人の關係を通してひきだされてくる。小栗はてゐると共にする鎮魂の道行によってもとの身体に蘇るのだが、その道行は未来に蘇生の希望をはらんだ道行である。（小栗が何故蘇生してもとの身体に復活

したかについては後で述べよう）ざんげ罪障の陰惨な調子はそこには払拭されているのだ。その明るさへの予感が餓鬼の姿からユーモラスな印象をひきだすのかも知れぬ。だがより根源的に云えば、ざんげ罪障の旅を穢を抜く鎮魂の旅、道行にきりかえた発想に求められるのであって、それはざんげを糧として、そこから道行のエネルギーを吸上げながら、行手に小栗の蘇生を確信している楽天的で現世利益的な観念があったからだと言った方がいいだろう。この観念は、死の穢れを此世に生きる姿、餓鬼身としてイメージし、しかもそれを究極的には鎮魂によって蘇生させることのできる確信に支えられているのだが、それは又同じことなのだが死と親しみ、死に愛着をもっている意識でもあるのだ。死に対する特殊な愛着がどのようなものなのか、それは土車にのせた小栗の餓鬼身をひたむきな情愛でくるみながら、その小栗の蘇生を現実に確認できず別れていく場面のでるの執心にあらわれている。死への親しみをこめた執心を理解しておかぬと、てるとの背後にある漂泊民の現実体験の特質がぼやけてくる恐れがあるので具体的に確めてみたい。

なにたる因果の御ゑんやら、ほうらひの山のおさしきて、つまのをくりになれたも、この餓鬼阿彌とわかるも、いづれおもひは、おなしもの、あはれみなふたつやれ、さてひとつのそのみは、きみのちやうとのに、もとしたや、さてひとつのそのみは、このかきあみかくるまひいて、とらせたや、こころはふたつ、みはひとつ

こころは二つ身は一つと餓鬼阿彌の小栗に別れて長の宿に戻らねばならぬでるの心境が語られているのだが、これをしてるの人間的な愛情の流露として、その献身的な愛護と骨おりによって餓鬼身

から解脱浄化されている小栗は此世に復活できたのだという考え方があふ。しかししてての執着は人間的というより、もっと別の呪術的な宗教性に媒介されてあらわれたものである。

餓鬼阿彌の姿は文字通り醜だ。しかし醜い餓鬼自身も、それが正に人間の執念の外化された姿である限り愛し得るという精神の運動がそこにみられる。醜であるからこそ逆に愛し執着してゆく行為である。このような執着をもし愛情と呼ぶならば、それは罪穢を抜くすて道行のひとひきが刻々と蘇生と浄化に連なるという呪術的な信仰を考えぬと理解できぬであらう。ここには漂泊民、賤民だけしか持つことのできなかつた独自の現実体験を伴った愛の形がある。

それにここには一対一の人間的な愛情関係と呼べるものは実はないのであって、てると小栗の関係は、愛情というより庇護や育成に近いものである。その意味からも、ここには古代から伝承されている幼神信仰の面影が反映されているのかも知れない。

幼神信仰とは幼く力弱い神々を守り育てて諸国を歩き、その苦難の生を代償として幼神の神威を守りおおせてく遊行漂泊の神人から出た信仰であって、歴史的には、義経と弁慶の関係、説経「愛護の若」の愛護と三人の育成人の関係、その他「しんとく丸」のしんとくと乙姫の関係など、説経は殆んどこの系列に入ってうかも知れない程重要な伝承である。そこに流れる人間関係は、明らかに愛情を含みこんだ育成の関係であって、目立つのはこの育成人の位置にいる人間が脱落すると、幼神にあたる主人公も同じ運命をたどるということである。「愛護の若」はその典型である。賤民である三人の育成人から離れて愛護は入水死によって、その悲劇的な生涯を終えるのである。ここに愛護の無力もさることながら、育成人の資

格喪失が愛護の死を決定づけた因子であるように思われた。それに對して「小栗」や「しんとく丸」には巫女的な役割をもったてゐてや乙姫が育成人の位置にいることによって、逆の明るい蘇生譚がついてゐるのである。蘇生させる担手として巫女的なものが如何に重要な意味をもっているかがわかる。

それしにても「愛護」と「小栗」の時点で、蘇生をめぐり、何故前者にはそれがなく、後者にあるのか、そして又「小栗」において蘇生すなわち現生での栄華な定住生活の完成という事が、漂泊民の意識にとってどんな意味をもつものなのか。

ここではひとまず小栗における蘇生の問題にしばらく論を進めてみたいと思う。小栗でゐる道の行が罪障を抜く鎮魂の意義を担う限り、それは当然浄化蘇生がある筈だし、蘇生後の小栗が長者として栄えたという結末も、祝言的な内容を加えて完結させる説経の常識として、さして疑問は残らないようにも考えられるが、漂泊民の精神の運動をそこにみようとするとするものとしては、「愛護の若」に蘇生譚がないという事実をも考慮に入れて、実は見逃すことができない問題をはらんでゐるのである。小栗は蘇生後、てゐると共に常陸の国に帰り長者と栄えたという結末が最後のところに置かれてゐるわけだが、これは別な見方をすれば、漂泊を己れ自らの宿業と考え、その為には罪穢を糧として歩いた漂泊民のエネルギーの涸渇であり、漂泊の挫折を意味してはいないかということだ。小栗が長者という資格で常陸という一定の土地に定着したことは、村落共同体の側から云えば小栗を常民として抱え込んだことになり、漂泊民にとっては彼らの漂泊性の完結＝死を意味し、觀念としては漂泊そのものの世界の崩壊であり、それは村落共同体を常に対岸視して、独

自な漂泊という行為体系を屈折しながらも持ちつづけた彼ら漂泊民の敗北であつたということにならないだろうか。

結論を急ぐ前に、長者という身分規定が漂泊民にとってどのように考えられていたかに関して推測をめぐらしてみたい。村落共同体の常民にとって長者は、觀念や空想の中での富と徳の理想的な人間像であるとともに、眼で確められる村落社会の内部に於ける生きた実在であり規範であつて、伝説や昔話はいわばこの生きた素材に還元され、汨過されることによって一層その信憑度を高めていたという關係がそこにあつたのではなからうか。それに対して漂泊民にとっての長者は次の如きものではなかつたらうか。

往時人の屋敷をほめ、邸宅をほめ、財宝の豊かなることをほめて、村から村へ漂泊した無名の詩人、無名の樂人がある。それは社会から賤民として輕蔑せられた祝ひ人である。……彼ら祝人が朝日長者の名を伝えれば民間にも朝日長者の名が伝えられる。遂にはそれが或る長者屋敷に附会されて話が固定してしまふ。そうして朝日長者という特定な長者の話が出来上つて了う。しかしながら田野朝日長者などという名を見ても、朝日長者というは決して固有名辞でないことは解る。

漂泊民と長者の親近感が並々でないことがこれでもわかる。長者のイメージを抱きながら、それを長者名に託して持運んだ漂泊民がいるが、その祝人は説経を担う芸能集団とも無縁ではあるまい。ここで重要なことは漂泊民によって運ばれる長者名が固定したものでなく流動変化して、地方毎にその土地に見合つた名で呼ばれてゐるという事実である。いわば漂泊民にとっての長者は、ひとつの土地に固定したイメージとして実在してゐるのではなく、土地毎に変化

してゆく観念としての長者の自己運動であり、その場合の土地はこの観念に実在の形を与える媒体にしか過ぎないということなのだ。この関係はそのまま小栗の場合にも妥当する。小栗であるが長者として常陸に定着、そこでひとつの完結した世界を残したということは、長者という観念の中で小栗であるてがとらえられ照し出されて常陸という土地を媒介として定着したことを意味している。

しかし漂泊民が何故こうした観念としての長者像を持たなければならなかったか、又それは現実に対してどのような有効性を発揮しているものなのか、説経節小栗の背後にある歴史的状況に焦点をしばって考察してみたいと思う。村落共同体内部の構造上の変化に対応して進行する漂泊民の定住化の現象と直面して、その現実的变化に同化するのではなく（同化することは漂泊民が村落共同体の内部に抱え込まれること＝漂泊の完全停止を示す）又その変化から離反してゆくことも慎重に回避しようとする姿勢が、（変化の現実的条件を無視しては漂泊民の生存が保証されぬ）、村落内の山の下とか河の縁とかいう場所に半ば定住という形で漂泊民を居住させることになる。この半定住という現実をとにかくも肯定し、（否定したとき小栗英雄像が現われ、犯しの行為が生れたことは前に述べた）その肯定の上に立って自己の姿を理想化し、観念として抱懐するとき、そこに長者の像がイメージされるのではないかと思う。そして半定住という形式が常に内部にはらんでいる定着しつつ漂泊するという二つの契機は、彼らが観念として温める長者像の性格をも同じように制約しているのである。

漂泊民の長者像には一定の土地に結ばれた完結した面（定住の理想化）、と他の未完結（漂泊）への可能性を常にひそめた二重構造

があるのだ。小栗であるての長者像に即して云えば、それはこの完結と未完結の二つの契機を内包する相対的完結性を獲得しているといえよう。この相対的な完結性は漂泊民の未完結であるべき漂泊の時間にひとまず限定をし区切ってゆく。漂泊を本来の使命感にまで高めている彼らにとってこの自己限定は現実との妥協であり、或は屈服と見做することもできないはない。しかし長者像がその内部に未完結の契機を保留する限りに於いて、妥協は非妥協と連なり、村落内に定着することは、逆にそこを足場として漂泊のエネルギーを新たに始動させてゆくという意味では決して敗北ではない。むしろこうした自己限定がないと、彼ら漂泊民は現実との接点を失い、村落内部に拠点をなくし、そのエネルギーはいたずらに空転して消滅してしまふだろう。現実の状況と鋭く対決し、自己の漂泊の運動を限定し完結しながら、しかもなおその限定を契機として無制限に漂泊を持続してゆこうとする漂泊民の方法意識を通して、ここには彼らの現実把握の鋭どさと認識の確かさのようなものが感じとれるのである。小栗であるての蘇生の劇も、以上のような現実認識に支えられて必然的に長者として完結し、その世界の幕を閉じたのであった。長者を予想しない蘇生の劇は、現実認識を欠いた空疎なものとして、「小栗」成立の時代にはすでにそぐわぬものであったのではないか。しかしそれならば、長者像によって明らかとなった未完結の完結という漂泊民の運動を現実には担った主体はどこに求められるかの問が残る。云うまでもなくそれはてに象徴されているような巫女的な存在者達であつたらう。長者という完結体に収斂される為にあった道行の先頭に立ち、蘇生を現実化したての行動を描いて他にはない。

今蘇生の問題に限って云えば、小栗を蘇生させる必要は村落共同体の常民の側にもあった。それは毒死した小栗の霊がもしそのままうち捨てられるなら、その霊は御霊と化して常民の生活に祟をなすかも知れないからだ。常民感覚の中には、不遇な死を強いられた英雄・武者の御霊は畏怖の対象であって、それは祭り込んで和霊としてしまうより方法がないという封じ込みの信仰があったことについては冒頭にもふれておいた。しかし小栗を蘇生させて、これを更に神格として祭り込める実践的現実的な力は彼ら常民の中にはなかった。

同じようなことは常民と反対の位置に立つ漂泊民についても云えよう。小栗の霊を蘇生させて長者として完結させ、最終的には神として祭ったのは彼ら漂泊民の力であつたろう。しかし漂泊民といつても、餓鬼身の小栗それ自身に象徴されているようなざんげを生きる漂泊者の群や、宗教的芸能集団それ独自の力では蘇生は不可能だった。或る意味でこれら漂泊民の象徴である餓鬼身が、この世への執心に焼かれてはいても、それ自身の力では全く蘇生の道行を踏み出すことのできなかつた存在であつたことを今一度ここで思い起して欲しい。

村落共同体の常民にも、漂泊者の群にも直接小栗を蘇生させる力はなく、それは二つの共同体を結ぶ位置にいてパイプの役を引受けていることによって担われているのである。この役割をシンボリックに表現しているのは、美濃国青墓の宿で水仕奴隸の労働に従って辛酸をなめる姿にあらわれている。てくてくはすでに定着性を持ち始めた宿駅の遊女宿の水仕として労働にたずさわる一面がある。それと他の巫女的な資格をそなえた漂泊民的な呪術性をもかねている

ような存在なのだ。このようであるには、困難な現実との闘争の中で漂泊民が創造しなければならなかった生きる為の意欲の結晶のようなものがある。村落共同体の常民に向つては、巫女的な呪術性を操ることで異質であり、漂泊民に対しては水仕として労働しながら定着しているという関係で対置される。このような性格を付与されたててによって小栗が守護され蘇生して、二つの共同体の矛盾や対立によって惹起された不協音が消されているということは、やはりてくてくのような存在者の位置を現実の方で必要とし、又歴史的にも有効性を発揮していることを物語っていると思う。言葉を代えれば、てくてくという村落共同体の内部に位置し、同時に漂泊民ともつながってゆこうとする人間に庇護され先導されて始めて蘇生の道行は実現する。そして漂泊民は失われた自らの内部にある漂泊のエネルギーを恢復してゆくのである。てくてくの行う道行に集まってくる街道の常民や漂泊民の姿は暗示的だ。そこにはかつて敵役であった横山ですらも協力している。一切のものがてくてくを中心に結集し、回転し、流れ出しているような錯覚がそこに生れている。道行の担手となつててくてくのこのような複数の人格からでてくる逞しい行動力は新鮮で、それに比べれば蘇生後の小栗の像がかすんでみえるのも致し方ないことも知れない。

しかしこうした行動力を示し得たてての役割と位置も、やがて近世に入ると急速に涸落消滅して、もはやそれは二つの共同体をつなぐパイプとはなり得ない分裂を強いられ、巫女と遊女という職業的な身分に固着して、歴史の表面から姿を消してゆくわけである。「小栗判官」はおけるてくてくには近世を望見している姿勢が感じられるが、正確にはその直前の中世末期の時代の漂泊民が常民と関係

し、その関係を通して常に前方へと自己を押進めようとする姿勢を象徴的に示しているものだと思う。……

附記

小栗とてゐるが死後八幡神として、又縁結びの神として美濃の青墓に祭られたことについて附説してみたい。このことがはっきりしない論として完結しないと考えるからである。

そののち生者必滅のならひとて、八十三の御ときに、大往生をとけたまへる 神や仏いっしょにあつまらせたまひて、かほどまで、しんつうに、たいかうのゆみとりを、いさや、かみにいわひこめまつせの衆生におかせんか、そのために、小栗とのをは、美濃国あん八の郡すのまた、たるいおなことのしんたいは正八幡あら神とおいわひある。おなしくてゐるの姫をも十八ちやうしにも契り結ぶの神とおいわひある。契りむすふのかみの御本地も、かたり、おさむるところも、はんしやう、みよもめてたう、くにも豊かにめてたかりけり。

小栗とてゐるが人間であつたときの労苦が報われて、死後とてゐるゆかりの深い土地、美濃国すのまたに、小栗はあらひと神八幡神として、てゐるは縁結びの神として祭られたことが、祝言的な語り口を通して述べられている。注意したいことは、小栗やてゐるは神・仏によつて、それぞれ前記の神体に祭り込められていることで、同じ型は「せつきやうかるかや」にも見られる。「かるかや」ではしげうぢと石童丸が死後仏によつて善光寺の親子地藏として祭られたことが書かれている。

これに対して「愛護の若」では、自殺した愛護の霊を叡山の僧侶と村落の氏子が山王権現として祭り込めたことになっている。愛護

では神仏という漠然とした非現実的なものでなく、叡山の僧や村人達Ⅱ在地的な常民によつてその祭り込めの主体が負われているのが目立つ。悲劇的な集団自殺を伴う愛護の死は、蘇生や復活を期待できない死であり、その死は在地的な常民によつて祭られ封じ込められて終る運命をあらわしている。こうした愛護の死と運命の背後には、恐らく漂泊民のエネルギーが、巫女的なものを媒介にできなかった為に生じた村落共同体との具体的な接触を失った方向性の喪失を意味する現実社会にむけての虚無の認識があつたのかも知れない。そして愛護の霊が村落社会の常民に封じ込め祭り上げられたということは、漂泊民が村落共同体の内部へ完全に同化され、定着させられたことを示し、それは漂泊民の決定的な挫折を物語るものであるかも知れないのである。

この漂泊民によつて悲劇的な結末を意味する暗さに対し、小栗の結末は明るい。小栗を八幡神あらひと神として祭り込めたのは具体的な常民ではなく、神仏という非現実的存在である。神仏とは或は漂泊民自ら仮構したそれ自身の顔であらうか。常民の手を拒否して自らの手で漂泊の痕跡をとどめようとするはれがましさがそこにはある。しかしその記念碑的な小栗とてゐるの神格も、村落共同体の内部に場を占める限りにおいて常民達と無関係であるわけがない。常民達によつて小栗八幡神は、外からの災害を防ぎ村落生活の安全を保証する守護神として仰がれていたに違いない。冒頭で小栗は村落共同体を侵犯する英雄神として設定されていたが、結末では逆に村落共同体を守護する防塞的性格としてあらわれている。漂泊民に対する常民の勝利がここにも感じとれぬわけではないが、しかしそれは片手落ちで、小栗八幡神が漂泊民の記念碑的な神格として、神々

の命によって祭られているということは、漂泊民を透してかぶさってくる御霊的な攻撃侵犯する性格を失なっていないといえよう。その靈威を失わぬ限り「小栗」を背負って語り歩く芸能の徒に対する畏怖感は消えず、漂泊民は語りにおける宗教的な効能を確めつつ村落の中を漂泊しつづけていったろう。

かほどまでしんしつにたいがうのゆみとりを、いさやかみにいわひこめ末世の衆生におかません。……

末世の衆生Ⅱ常民に拝ませようとする意識が大家の小栗をあらひと神にしているのだ。ここには漂泊民の倨傲と呼んでいい程の昂然とした氣概が感じとれないであろうか。しかしあらひと神小栗は十八丁下のであるの神格に添って見守られている。この構図はやはり極めて象徴的なものだ。あらひと神的な靈威を無拘束のまま放任するのではなく、愛情と庇護の二つの眼差しが神に転生して後も、てるての中に生かされて小栗は見守られているのだ。それは漂泊民の昂然とした氣概とは別に、その氣概を常に村落共同体との関連の中で具体的エネルギーに転化しようとする漂泊者の真実の姿、即ち漂泊者の歴史感覚の鋭さのようなものを表わしていると思う。

侵犯と庇護、この二つの契機をひとつの顔として提出しながら現実を横切る漂泊者のエネルギーこそは村落共同体との対立抗争の中で、必然的にとらねばならぬ彼らの巧妙なる武器であったと思うのだ。……

参考——

——三九年修士卒・法政大学女子高校勤務——

・折口信夫全集

・堀一郎『我が国民間信仰史の研究』

・定本柳田国男集

・室木弥太郎「せつきやうの周辺」

・民族と歴史（長者号）

・豊田武「武士団と村落」

原稿募集

日本文学誌要は、法政大学日本文学科の教員・卒業生・在校生によって構成される法政大学国文学会の機関誌であり、本学における研究の成果を世に問うてゆく場です。会員諸氏の投稿を切に希望します。

締切 第一号は本年一月末（以降随時）

枚数 特に制限はもうけないが大体三十枚前後。

内容 日本文学、国語教育にかんするものならばその如何を問わない。

宛先 法政大学国文学会（ただし在学生のばあいは、指導教授あるいはゼミナール委員を通じて提出されてもけっこうです）

なお、投稿原稿は、法政大学国文学会編集委員会にて閲読させていただきます。採否は委員会にお任せ下さい。